

優秀賞

勇気を持って

青森県 むつ中学校 二年 石谷 檜葉

私が去年、祖母のいる愛知県に遊びにいったときの事です。

八戸駅から新幹線で東京まで行き、乗りかえて、到着まで七時間くらいです。その日は、父が仕事の都合で行けず、母と二人での旅行でした。

東京までの途中、トイレに行こうとしたら、手洗い場のところにおばさんがしゃがみこんでいました。私は声をかけることができず、席に戻ってから母に話しました。すると、

「なんで知らんぷりしてきたの!? 具合が悪いかもしれないでしょ! 」と怒鳴られました。

母はすぐ席を立ち、おばさんのところに向かいました。

「大丈夫ですか? 車掌さん呼んできますか? 」

と声をかけました。でも、「大丈夫です。」と言われ、私と母は席に戻りました。

そして、母は言いました。「自分だったらって考えてみなさい。具合が悪くて、たった一人でいるとき、通って歩く人が知らんぷりだったら、どういう気持ち? 」と。

私は、とても恥ずかしい気持ちになりました。心の中で、(小さい子だったら声をかけられるけれど、大人の人だから声をかけにくかった) というのが本当の気持ちでした。

到着まで、あと一時間ぐらいになったので、ごみを捨てにしようとしたら、さっきのおばさんがまだ同じ場所にしゃんがんでいました。今度こそ、私は勇気を出して言いました。

「大丈夫ですか? 」

私がすぐ戻らないので、遅いと思った母が来てくれて、いっしょにおばさんを多目的室に連れていきました。車掌さんも「到着まで横になってください。」と言ってくれたので、安心して私たちは戻ろうとしました。

そのとき、おばさんが私たちに「着くまでいっしょにいてほしい。」と言いました。私は(えっ!?) と思い、母の顔を見ました。母は「いいですよ。」と答え、ドアを閉めて座りました。

新幹線の多目的室に三人です。それも、初めて会った人と。

おばさんは、「一人娘に会いに東京に向かっている」「五所川原の農家に嫁いでずっと畑仕事をしていたので、旅行は四十年ぶり」「人ごみで不安になった」「こんなに話を聞いてもらったのは久しぶり」などと、ずっとずっと私たちに話し続けました。

東京駅に着いたとき、母は、「困ったときはお互いさまです。娘さんと楽しい旅行にしてください。」と言い、私たちは次の新幹線に乗りました。

困っている人がいれば、迷わず助けようとする。相手の立場になって考える。「ただ話を聞いてあげるだけでも、やさしさなんだよ」という母のように、私もなりたいたいと思っています。

それから二週間後、お礼の手紙とチョコレートが届きました。手紙には、「やさしくされたことが、とてもうれしかった」と書いてありました。

今は、見て見ぬふりをする人が多いですが、困っている人がいたら、手を差しのべるべきだと思います。「誰かに親切にすれば、いつか自分に返ってくるかもしれない」という母の言葉が、いつも忘れられません。